

議員研修報告書

報告者 (会派等) 創政・改革クラブ

1. 研修期間	令和6年8月6日（火）
2. 研修場所	北海道余市町役場
3. 研修テーマ	市議会が長年求め続けている、自治体の憲法「議会基本条例」制定に対し、田中市長はR4年度においてようやく制定を約束したが、第9次総合計画の策定期限にあたることから9次総策定後に検討を持ちこしている。 北海道余市町は、新町長の策定提案のもと、主幹的部分を住民が担い、住民の手で条例を作り上げた。 議員全員で構成する高山市の自治基本条例策定に対する特別委員会の構成員として、策定における手法を参考とすべく学び、それを通じて改めて自治基本条例の本質を研修する。
4. 研修項目	余市町自治基本条例の制定について
5. 概要	※別添付資料参照 【質問事項と回答説明】 Q1. 自治基本条例策定の際、最も大切だと考えたこと A. まちづくりの主人公は町民であるということ 「地方自治の憲法である“自治基本条例”を制定し、町民が主人公であるまちを明文化します。」 Q2. 町民の理解度向上における課題と取り組みは A. 町内での普及啓発が消極的で、担当以外の職員の大半は理解が希薄だった。そのなかで、町民の理解度向上に向けた働きかけも質・量ともに不十分だった。 Q3. 住民主体で策定に向かった背景、プロセス、課題は A. 地方分権一括法の施行に伴う自治体の自主性強化を背景に、住民主体の条例制定は時流に乗ったものだった。計38回の準備会、策定委員会での活発な議論のもとに素案が作成された制定プロセスは大変意義深いと認識しているが、結果的に「条例制定」がゴールとなってしまった。 Q4. 策定委員会の雰囲気、議論の進み方は。住民意思が反映

	されたと考える部分は A. 委員の一人ひとりが思いの丈を発言していた。それを基に事務局がたたき台を作成し、さらに議論が交われ素案が完成した。住民(委員)の意見が最大限反映された条例。 Q5. 策定の取り組みでまちが変わったと感じられる部分は A. 特に変化はない。条例制定がゴールになってしまい、その後の取り組みも不十分になっている。 Q6. 策定直後にコロナ蔓延が始まったが、条例推進にあたって不都合が生じたことは A. 「余市町民自治推進委員会」を书面開催せざるを得ないなどあり、普及取組みがますます停滞した。 Q7. 策定後の課題と解消への取り組みは A. 行政の意思決定のスピード低下が懸念される。(事例は実際には発生していない)
6. 考察・感想	なぜ自治基本条例が必要かと言えば、市長が変わり議員も変わり市民も変わっていく中で、そのまちの行政の在り様として変わってはならない自治体の憲法の存在が、住民の人権とまちの民主主義を堅持する背骨となると自分は考えているものだから。 従って、これが策定されたからといって、俄かにまちの様相が変わったり住民の生活様式が変わったり財政運営状況が変わったりするものではなくて当然であり、特に大きな変化が見られるといった性格の条例ではない。存在こそが何より重要だと考えている。 余市町の説明の方は「町長選挙で公約とした自治基本条例であり、作ることが目的となってしまったため、策定がゴールになってしまった」としきりに謙遜しておられた。私は挨拶の紋切り型として「合併後、日本一広大なまちとなった高山市の一体感醸成のために必要だ」と述べて、却って評価をいただいたが、それこそ自分の美辞麗句であり、余市町の策定の地道な取り組みこそが高く高く評価されると感じている。 住民主体の策定委員会によって策定されたことが何より素晴らしい。有識者の指導やアドバイスは成果物の根幹となるものであるが、有識者自身を策定の委員長にせず、アドバイザーとして住民が推進していったことは評価できる。 また、町が事務局に徹底し、行政側の意向を予断として差し挟まなかったことも評価できる。 一般論として、委員の構成(住民代表)が自治体の関係団体代表であることは、あらゆるまちの様々な委員会でもそうで致し方ないのだろうが、いつも同じメンバー構成となってしまうことは発想の自由度を奪い画一的な結論で終始してしまわないかと思いつけている。結果として、行政トップと町の有

力者に都合の良い結論誘導になってしまわないか、という心配である。ではどうしたらよいかのアイデアは持っていない。

自治基本条例の類型は、策定委員会が協議し決定した「総合条例型」がやはり一番良いのではないか。理念・住民参加・議会・各主体の責務等バランスよく盛り込まれている。他の条例に対して最高規範性を持つのにふさわしいと考える。

条例の住民への浸透は「取り組みも積極的に行っていなかったのではなかなか進んでいなく、気付きとして今後力を入れていく」と言われていたが、HPや広報誌、余市町自治基本条例講演会の開催など、やるべきことはきっちりやられていた。ただ内容の性格上、住民の興味は引きにくいものだったということかもしれない。策定後すぐコロナ蔓延で社会が停滞したため、浸透や意識醸成のグッドタイミングが逸せられてしまったもったいなさも実際にあると考える。ただ、住民の策定委員は、策定段階においても一人一人の思いのたけを十分に発言されたと聞いており、その方々は策定後も熱い思いを持ち続けておられるというところからも、今後の取り組みは注目される。

その中心的役割として「余市町民自治推進委員会」が組織されており、こういった高山市議会における「議会基本条例推進協議会」のような存在は、条例を形骸化させない重要な取り組みだと考えた。

策定後の課題としては、条例との整合性を意識するあまりに「行政としての意志決定のスピード低下」の懸念を話されていたが、そういった事例は実際に発生していないということでもあり、両立しないものでもないと考える。

現在の高山市の状況を見るにつけ、スピードを緩めよというつもりはないが、意思決定のプロセスがあまりに雑で独善的であるため、ますます条例の必要性を痛感する。

そういった状況にも鑑み、高山市自治基本条例に必ず入れていただきたい文言がある。それは(市の役割と責務)にカテゴライズされるものだが、『市は、住民の直接意思と住民の間接意思である議会の決定を最大限尊重する』の一文であり、余市町の条例にはない。余市町の条例に照合するならば、「町は自らの判断と責任において公正で誠実に事務を管理し、執行する責務を有する」の前段に必ず入れ込むべき条項であると強く考える。

議員研修報告書

報告者 (会派等) 創政・改革クラブ

1. 研修期間	令和6年8月7日（水）
2. 研修場所	北海道札幌市図書館・情報館
3. 研修テーマ	図書館は社会変化状況に合わせた発展、変化を察知した対応が求められている。その中で札幌市図書館は、「札幌市民交流プラザ」内に情報環境の変化をとらえた「札幌図書館・情報館」を設置した。図書館の機能進化とともに、高山市の駅西に建設予定の複合施設に設置予定である図書館の分館の形なども併せ視察研修を行う
4. 研修項目	札幌市図書館・情報館の設置目的、機能、役割、効果について
5. 概要	※別添付資料参照 ○まちなかの複合交流施設「札幌市民交流プラザ」内に設置 ○ビジネスパーソンに寄り添う、まちの情報拠点(機能特化) ○本を貸さない図書館 ○誰もが落ち着ける空間づくり ○人に寄り添う本棚づくり ○リーチカウンターは、司書の「レファレンス」と「出張相談窓口」で専門家をつなぐ、ビジネス支援のゲートウェイ ○最新の情報は“人の頭の中”にある ○ダウンロードできない価値 ○エンペデッドライブラリーがつくる未来
6. 考察・感想	「札幌市図書館」は中央図書館を中央施設として、その機能もしっかり保ちながら、視察目的媒体である「情報館」は、札幌市図書館の分館として、先進中の先進的考えを基に管理運営を行っている。 本館の機能補完のための分館ではなく、連携はしつつも、完全に独立した新たな「知」の集積・発信・活用およびアクセスのための施設として存立している。 ビジネス街という都市内立地と、複合施設コンテンツである立ち位置を最大限に考慮した“尖った”コンセプトとその具現化策が、一つ一つ全部腑に落ち、強い衝撃と驚きを持って新たな発見につながったように感じている。これによって、それまではさほど図書館がコミットできていなかった新たなユーザー層を得られたこともお聞きした。 レファレンス(調べもの支援)への強いこだわりを評価する。立ち寄りやすいようカウンターを施設の中心に

据え、わかりやすさを重視して、名称も「リサーチカウンター」とされた。同カウンター内に、日本政策金融公庫や法テラス、北海道よろず支援拠点など各種専門機関による無料相談窓口も併設し、経営相談に司書が同席し、必要な資料を探してきて提供するなど、司書と相談員との連携を促すことで、「私」へ寄り添いを深めている。未経験者が商工会議所や法律事務所を直接訪れて相談をかけることの敷居の高さを十分に理解し、コンセプトに基づいた図書館の新たな機能の具現化につなげている。高く評価したい。

コンセプトを「はたらくことをらくにする」とした意味は「働くことは自らの成長が促されることもあり素晴らしい点も多いが、仕事上や生活上でいろいろな壁に当たることも多い。自ら消え入りたいという気持ちにさえなるかもしれない。そんな時に、一冊の本や言葉・情報が、ひとを支えることが多い。その出会いを作っていきたい。」だと聞いた。深く優しい目線での施設運営であることに感銘を覚える。

限られた空間の中で、テーマは3つに絞った。

- ①「WORK(仕事に役立つ)」約2.5万冊
- ②「LIFE(暮らしを助ける)」約1万冊
- ③「ART(芸術にふれる)」約5千冊

この3つに絞る中では、文学や児童書、絵本のコーナーなどを置かない潔さに好感を持った。子育て世代に冷たいのではない。建物が複合多機能施設であるだけに、子育て世代も図書館利用を両立できるということだ。

テーマを絞る中でも、「旅」や「食」のサブカテゴリーは存在する。「旅」はワークライフバランスへのアプローチの役割として、「食」は家庭料理でなく土地柄から食の分野で働く人のためのプロ仕様のサジェスションとして、すべては「はたらく私」をまっ先に考える、「ビジネスパーソン」支援で串刺しをされている。

テーマに沿ってレギュラーセミナーを行っていること(煥章館の取り組みにもある)もすごいが、タイムリーで突発的なセミナーも行っている。「最新の情報は人の頭の中にある」という考えの下、創造性を育むにはもちろん図書も有効だが、ひとと「私」が出会うこととそこから生まれるものが多いと考え、働く人のためにメッセージを送り続けるためだという。

日本十進分類での配架をしていない。情報館独自のオリジナルテーマから、「大テーマ」「中テーマ」「小テーマ」と階層を作り、総論から各論へと深堀していくことができる仕組みとなっている。今、まさに困っている、内心の不安から一刻も逃れたい、そんな人たちに一目で課題や悩みを解決できるような棚を作りたいのだという。「私」に寄り添う図書館でありたいことからの逆算である。

「本を貸さない図書館」を初めて聞いたし、見た。貸し出すことによって、今すぐ情報に触れたい人の機会を奪わないためだという。いつでもすべての情報がここで待っている状況を作りたかったためだという。

館内での会話も自由とし、「図書館ではお静かに」という常識からも距離を置いている。グループでの調べものや図書館資料を利用しながらのビジネスミーティングを活性化する目的だ。結果として、ビジネスパーソンはもちろん若い女性グループなど、これまでの図書館ではあまり見かけなかった多様な利用者が来館しているという。

もう一点、別の角度からの衝撃があった。

札幌市図書館の全体組織そのものが、指定管理ではなく直営で運営されていることだ。

現在、高山市図書館は、素晴らしいリーダーにより良好な指定管理運営がなされているが、リーダーが指定管理受託企業の雇用者である限り、リーダー自身が持つコンセプトで図書館を構築することは難しい。一方、市の職員さんだけでは日々の業務に追われるのみで、ドラスティックな改革は行えず、激変する社会状況の中にあって「知」へのアプローチは老朽していくことを余儀なくされる。

最も時代に即した運営管理を求めるならば、民間の優れた分野リーダーの監修のもと、司書や図書館員にも本質を伝導しつつ、画一的ではない管理運営を市が受け持つていくことではないだろうか。

札幌市の図書館体制は、まさにそういったものであると思わされた。

以下、ハッとさせられグイグイ引き込まれたお話について、一部を記述したい。説明をいただいた職員さんだけでなく、資料としていただいた浅野隆夫札幌市中央図書館調整担当部長のお話しかからも拾っている。

現段階では羅列になっているが、心にとどめておきたい気付きとして、視察の考察に加えておく。

○知へのアクセスに存在する現代の多くの障壁と求められる能力

- ・ネット上に氾濫する不確実な情報や偏った見解
⇒それらを見分ける能力
- ・知識や情報は常に更新されるもの
⇒古いものや不要なものを捨てる能力
- ・知識や情報は個人の経験や価値観によって異なる解釈が可能
⇒多様な視点や意見を尊重する能力

○AI は人間の知を模倣するだけでなく、人間とは異なる種類の知を生み出し得る一方、因果性や論理性に基づかないことがあり、人間にとって理解しにくいこともある。しかし、それゆえに AI は人の思いつかないような発想や解決策を提供することもできる。AI と人間は、互いに学び合い、刺激し合い、協力し合うことで、より豊かな知の創造に貢献できる。しかし、人間の側に創造性の力がなければ、お互いに学び合うこともできない。創造性とは新しい価値を生み出す力であるが、この力は生まれつきのものでな

く、磨くことができるものである。

- 個々の「私」にとって必要な図書館とは、単なる「図書の館」ではなく、人間が自分をバージョンアップするために通う場であり、多様な形で情報に触れられるまちの機能
- 図書館は宝の山、されどものすごく使いにくい宝の山
 - ・初めて訪れた人が価値あるものを見つけられない
 - ・司書の頑張りが実を結ばずもったいない
 - ・ライトユーザーのリピーターの取り込みができず、ヘビーユーザーのリピーターをまわしているだけ
- 図書館イコール図書の館でいいのだろうか
図書館員は、喜ぶ利用者の笑顔を見て喜べる人たちだが、時として、使っていただく人のことでなく、図書のことを出発点として考えていないだろうか
- “ネット予約した本を自宅近くで借りられる”、“どこでも本を入手できる「クラウド化した図書館像」”など本の流通を効率化することは推進すべき。しかしながら、施設がある意味、司書がいる意味、そしてわざわざ訪れることで満足できるような「ダウンロードできない価値」を産むことと両輪の図書館でありたい
- 「本は人なり」という言葉があるが、いろいろな「ひと」が語りかけてくるような本棚であってほしい。

情報館の取り組みによって、何が起こったか。「本の世界にまた戻ってきました。」「泊まれませんか？」「やる気の出る空間ですね。」「漠然と悩んでいた頭の中がクリアになりました。」などの声が届くようになったという。「自分と同じことで悩んでいる人があるんだ。」「克服した人があるんだ。」感じていただける実感を持つことができているという。

身近なところでの高山市への反映を結論から述べると、駅西に建設が予定されている複合・多機能施設の図書館分館も、「札幌市図書館・情報館の」ような確固としたコンセプトを持って設置されるものであってほしいと心から願うものだ。

そしてまた、単にそれだけの結論ではなく、「公共施設もまた人なり」という、そんな思量に巡り合うことができた、素晴らしい視察であった。